

県内初 心臓ロボット手術

徳大病院 傷口小さく早期回復

徳島大学病院は、血液を一定方向に流す心臓弁の一つが正常に閉じず、血液が逆流する「僧帽弁閉鎖不全症」の治療で、県内で初めてロボット手術を導入した。従来の手術より傷口が小さく、術後の痛みが少ない上、回復も早いという。

僧帽弁閉鎖不全症には、動悸や息切れといった症状があり、進行すると心不全や心房細動を引き起こす。患者は100万〜200万人いるとされる。米国製のロボット「ダビランチ」を使った今回の手術では、胸部数カ所を約1〜5センチ切開。執刀医が高解像度カメラで患部を確認しながら、手ぶれ防止機能の付いたアームを操作し、傷んだ弁の切開や縫合を行い、修復した。

僧帽弁閉鎖不全症は薬物療法では根本的に治せず、胸の中央を縦に大きく切開する外科手術が必要になる。胸骨を切るため回復に時間がかかり、大きな傷痕が残しやすいという課題があった。体への負担が少ない内視鏡手術も行われているが、難易度が高く、より安全で確実な手術法が求められていた。

6月に1例目の手術を実施した。患者の症状は改善し、経過も順調という。心臓血管外科の秦広樹教授は「症例を積み重ね、質の高い手術法として確立を目指す。治療対象を大動脈弁疾患などにも広げたい」と話している。（山口和也）



県内で初めて心臓疾患の治療に導入したロボット手術＝徳島大学病院（同病院提供）